

『エイコーン——東方キリスト教研究』第四十六号 拡刷  
一一〇一年五月

書評会

ハンス・ゲオルグ・ベック、戸田聰訳『ビザンツ世界論』

『ビザンツ世界論』に見るH·—G·ベックのビザンツ理解をめぐつて

戸田  
聰



(知泉書館、二〇一四年、五六一+三一頁、九〇〇〇円+税)

# 『ビザンツ世界論』に見るH·G·ベックの ビザンツ理解をめぐつて

戸田聰

## 一・はじめに

筆者が本稿を執筆するに至ったのは、二〇世紀ドイツ・ビザンツ学の泰斗ハンス＝ゲオルク・ベック（一九一〇—一九九九）の主著 *Das byzantinische Jahrtausend*<sup>(1)</sup> を筆者が翻訳・刊行したためであり<sup>(2)</sup>、そして直接のきっかけは、本学会の二〇一五年年次例会で同訳書『ビザンツ世界論』の書評会が行なわれたことである。

同書評会では複数の論者から本書（正確に言えば邦訳書）

の読みにくさが指摘されたが、そもそも本書は、原著自体が容易に通読を許さない書物である。<sup>(3)</sup> 実際、専門家の多くも（特に、書評を担当した学者たちですら往々）本書を通読していないようであり<sup>(4)</sup>、理由として難解さを挙げることは的外れでなかろう。

ただ、時として晦渺とも評しうるベックの文章に対しても、いきなり通読など目指さずに気の向くままに読むという仕方でつき合うのが適當だといふことは、筆者には最初から自明だった。筆者が最初に接したベックの著作であ

る『ビザンツ世界の思考構造<sup>(5)</sup>』もまた、おもにビザンツ文學に関する、決して一読直ちに了解とは行かない（が、それゆえに味わいぶかくもある）論考の集成である。『世界論』もたぶん、諸所を拾い読みする仕方で読まれるほうが良いのではないか。本書がビザンツに関する多様な側面を扱っていることを思えば、そのような思いは一層強まる。

このような評価を持つ筆者が、本書の全体に関する論評を試みることが適當だろうか——こう自問する者が以下を記したことを、まずお断わりしておきたい。

## 二・ベックと日本のビザンツ学

ベックの業績は我が国では、掛け値なしに日本のビザン

ツ学のパイオニアと呼んでよい故渡辺金一氏（一九二四—二〇一）。<sup>(6)</sup>本人は「渡邊」と自署しておられたので、以下それに従う）によって精力的に紹介された。

ビザンツ学と、本学会すなわち東方キリスト教学会が自らの使命とする東方キリスト教研究とは、本来互いに極めて近く、もっと相互浸透が行なわれてよいはずだが、実際にはそうなっていない。これにはもちろん理由があり、

東方キリスト教学会に所属する多くの研究者の関心が思想や靈性へと向かっているのに対し、ビザンツ学を専門研究者たちの主たる関心は、およそ日本における前近代史研究（特に西洋前近代史の研究）における王道的関心事とでも言うべき、國制史や支配の構造（の歴史）、或いは少し前までは階級史觀との関係で社会經濟史、といったものに向けられてきた、という事情がまず指摘できる（例えば、長年ビザンツ学研究者たちの関心を集めてきたテーマの一つは、渡邊氏自身が精力的に取り組んだいわゆるビザンツ封建制をめぐる諸問題である）。このように、近接する二分野が互いに背を向け合つて存在するという状況が続いてきたのは、どちらの分野でもそのような形で学問を営むことが可能だつた、或いは可能だと思われてきた、からだろ。

本来言わずもがなであるだろう、学界の一般的な状況とでも言うべきこのようなことを記したのにももちろん理由がある。というのも、もともとベックは（上述の二分野のどちらへの帰属かと、いう点にあえて関連づけるなら）東方キリスト教研究に位置づけられると言るべき内容の研究によつて自らの研究者人生をスタートさせたと言えなくもないからである。筆者がここで念頭に置いているのは一九三七

年刊の彼の学位論文であり<sup>(2)</sup>、特に、同書がOrientalia Christiana Analectaとし、明らかに東方キリスト教研究にかかる叢書の一巻として刊行されたことは注目に値する。

しかし、日本でベックの業績を紹介した渡邊氏は、おもに国制史関連の業績に言及することによって、ベックを全くビザンツ史研究の側に取り込む形で紹介した。日本における東方キリスト教の研究者の間でベックがこれまでほぼ全く顧みられなかつたのは、一つにはこのような受容の仕方に起因するようと思われる。

この関連で、ベックの業績を紹介する渡邊氏の次の文章を引用しておきたい。

ベックは、一九三七年、神学者、マルティン・グラー・ブマンのもとでのドクトル請求論文、『ビザンツ人の神学文献に現れた撰理と宿命』をもつて、神学研究の道に入ったが、一九四九年ビザンツ学教授フランツ・デルガーモとでの学位請求論文「正しくは教授資格請求論文[Habilitationsschrift]」、『テオドロス・メトヒオス——十四世紀におけるビザンツ世界像の危機

』によつて、ミュンヘン大学のビザンツ学講師に就任、一九六〇年から、名誉教授となる一九七五年まで、同大学のビザンツ学教授として、第四代ビザンツ研究所長の地位を占めた。「中略」神学をもつてはじまり、文学、国制史、社会史と次第にビザンツ社会の〈下部構造〉におよぶ学問遍歴が、おそらくかれをして、ほかのビザンツ学者からはまず期待できない独特的の発言をおこなわせるのである<sup>(3)</sup>。

「神学者」のもとでの学位論文に端を発する「神学研究の道」から「ビザンツ学教授」のもとでの教授資格請求論文へと進み、彼自身は「ビザンツ学講師」「ビザンツ学教授」を自らのなりわいとした、及び、彼の研究関心が「神学をもつてはじまり、文学、国制史、社会史と次第にビザンツ社会の〈下部構造〉に」移動していく、という形でここではベックの研究履歴が紹介されている。筆者はこのような紹介の仕方を事実認識の誤りだなどと言いたいわけでは無論ない（ベック本人と親しくやりとりし、さらにミュンヒエンで一九七三～五年に在外研究を行なつた渡邊氏が、基本的な事実認識の誤りなど犯すはずがない）。また、ベックの

逝去に際して発表された評伝の中で、ベックから教わった学生の一人だったP・シュライナーは、渡邊氏と同様の理解に立脚してだろう、社会構造史 (*Gesellschaftsgeschichte*) への貢献を師の学問の魅力の一つとして挙げている。<sup>(9)</sup>

しかしその上で言えば、ベックの研究履歴に関する渡邊氏の上記の紹介はベック自身の研究関心のあり方を少々歪めているように筆者には思われる。

すなわち、ベックが社会構造史や国制史に関する論考を発表したのは彼がミュンヒエン大学のビザンツ学正教授だった一九六〇年～七五年の間に基本的に限られるが、果たしてそれら論考はベックの内的な研究関心の方向の移動

に由来する研究成果だったのか。むしろミュンヒエン大学のビザンツ学正教授という、単にドイツ・ビザンツ学だけでなく世界のビザンツ学を背負う立場にある者として、ベックは社会構造史や国制史に関して発言しないわけにいかなかつたのではないか。しかも、前任者フランツ・デルガード（一八九一～一九六八）が皇帝文書の校訂・刊行などやビザンツ皇帝理念に関する研究で知られた学者だったことを思えば、ベックへの目に見えない圧力が相当あつたとしても決して不思議でない。

それでももちろん、一流の学者たるベックはそのような外的要因を<sup>(け)</sup>気取られない仕方でユニークな切り口から社会構造史や国制史に関して発言していたようであり、その見事さゆえに渡邊氏は、上記引用のように理解したのではなかろうか。またそれゆえに直弟子のシュライナー氏も、社会構造史をベックの業績の特徴的な分野の一つと理解したのではなかろうか。そして無論ベック自身、それら論考を著すために相当の労力を費やしたに相違なく、その結果が例えば、ビザンツ皇帝理念に関する大胆な割り切りとでも言うべき次のような発言である。

「皇帝理念は、国制史の経過そのものからは、さして重要でないもの、事後説明的な機能をもつた一要素として、削除することができる」。<sup>(10)</sup>

しかし、こういった論考・発言がベックの内的な研究関心に由来する研究成果なのかどうかというと、筆者としてはなお躊躇を覚えるをえない。というのも、上で言及した一九六〇～一九七五年という期間以外における、国制史や皇帝理念に関するベックの論考は、管見の限りではまさ

に『世界論』における論述ぐらいしかないようだからである。<sup>(12)</sup>（但し、『世界論』におけるベックのそれら論述が特に国制史理解という点で独創に富んだ論述となつてゐる可能性はもちろんあり、このあたりをどう理解すべきかについては後述する。）

渡邊氏によるベックの業績の紹介に話を戻すと、思うにベックのビザンツ理解は、日本のビザンツ学者の草分けとして欧米のビザンツ学の成果を貪欲に吸収してきた渡邊氏自身の目から見て、全く異色のものだつたのではないか。

例えば、一九六八年刊の渡邊氏の著書の中でビザンツの精神性世界が扱われた際、氏がおもに参照したのはデルガードの業績であり、<sup>(13)</sup>ベックの業績については註の中でわずかに触れられるにとどまつている。<sup>(14)</sup>推測するに、同書での渡邊氏のこのような論述は、渡邊氏の偏りといふよりもむしろ、当時のビザンツ学の状況を忠実に反映しているのではない。か。そしてたぶん渡邊氏自身、ベックの様々な業績に親しむようになつたのは、早くとも一九六八年以降だつたのではないか。もちろん、仮にそうだとしても渡邊氏によるベックの業績の消化は極めて徹底的であつて、その結果、

一九七八年刊の上掲『思考構造』（因みに本書には、ベック

が同年に来日して各所で講演を行なうのに合わせて刊行された、來日記念出版と言つてよい性格がある）においては、付論として収録された渡邊氏自身の論考の中でベックの国制史関連の研究が紹介される一方、書籍の本体ではベックの業績の魅力を示すべくビザンツ文学を扱つた諸論文が収録された。後述のようにビザンツ文学の研究はベックの本領が發揮された分野の一つであり、その意味で、渡邊氏による同書編纂の仕方は極めて的を射ている。

そこでひるがえつて考えると、ベックの学問遍歴が「神学をもつてはじまり、文学、国制史、社会史と次第にビザンツ社会の〈下部構造〉におよぶ」ものだつたとする渡邊氏の整理はやはり、国制史や社会経済史を長年研究してきた氏自身の関心に引きつけ過ぎだとの觀が否めない。確かにビザンツ学正教授としてベックは国制史や社会構造史へと自らの研究の間口を広げたが、それは中心的な研究関心の移動を必ずしも伴わなかつたと理解するほうが正しいと筆者は考える。

この点は、上述のようにベックの逝去直後に評伝を書いたP・シュライナーも、自分の師の学問について二〇一一年時点で改めて論じる中で述べている。曰く、ベックの

研究の中心的関心事であり続けたのは広い意味での神学（シュライナー自身の言葉を使えば「教会、そして国家と社会における神学的思考」）だ、<sup>(15)</sup> と。

かくて、ベックのビザンツ理解を論じるにはビザンツの神学・キリスト教に関する彼の理解を逸することはできな  
い。

### 三・ビザンツの神学・キリスト教に関するベックの理解

ところで、シュライナーの一〇一一年の論考は、ビザンツの神学・キリスト教とのベックのかかわりを論じる際の重要な要素として、彼が人生の一時期に修道士だったことに触れている。それによると、高校卒業資格試験に合格した同じ一九二九年にベネディクト会のシャイアーン（Scheyern）修道院で修道士ヒルデブラントとなつたベックは、一九三六年の学位取得のあと修道院長との対立が続いた結果、一九四四年に、「口承伝承に従えば誕生日に」（ベック自身の言葉によると、という意味だろう）、修道院を去り還俗した。そして、この時にベックがいだいていたのは神学への疑問というよりむしろ信仰や教会への疑問であ

り、そしてベックは、神学それ自体を自らの中心的関心対象としたわけではないが、神学・文献というジャンルと、ビザンツ人の生活におけるその機能といった点とを終生問題にした、<sup>(16)</sup> と。

シュライナーのこのあたりの議論は明らかにベックとの私的な会話の内容などをも踏まえているようであり、これに対してとやかく言える資格は筆者にはもちろんない。ここでは『世界論』の訳者としての感想を記すにとどめると、例えば、オリゲネス、ニュッサのグレゴリオス、エウニアギリオス・ポンティコス、擬ディオニュシオス・アレオパギテス、証聖者マクシモス、新神学者シメオン、そしてヘシュカスムといった著作家・精神運動を総まくりして神秘主義思想の歴史をたどった部分（『世界論』、二九四一三二頁）は、叙述がこれら著作家の各々の勧所を押さえているという点で圧巻と言つてよからう（なお、この関連で、ヘシュカスムの代表的論者と言えるグレゴリオス・パラマスに対するベックの評価が非常に厳しいことは注目に値する）。そして、神秘主義思想の歴史をキリスト教史の裏街道と呼ぶならば、表街道に当たる教義史の部分にもベックはもちろん目配りを怠らず、そのことは例え、第二回ニカイア公会

議をリードした俗人上がりの総主教タラシオスという、神秘主义思想の対極に位置する人物への高い評価（同二八四一七頁）に現れている。神秘主義の歴史と公けの教会史との双方をこのようにバランス良く評価できる学者はめったにいない。さらにベックは、ビザンツの神学史全体に妥当する問題——『世界論』の小見出しを使うと「神学の硬直化」「公会議以外の教義上の権威の欠如」「神学の学問的伝統の欠如」「教義的体系叙述（の少なさ）」等々——を、歯に衣着せずに論じている。特にこのあたりは、ビザンツ・キリスト教の神学を論じる幾百の著者（大半は正教の立場に立っているであろう）からは決して聞けない話であり、だからこそ読む価値があるよう筆者には思われる。訳者としてもう一点感想を述べると、（いわゆる皇帝<sup>ショザロバビス</sup>に代わる概念として）「政治的オルトドクシー」という概念を打ち出したベックはこう述べている。

私にとって肝心だと考えられるのは、すぐれてビザンツ的な構造なるものである。（中略）私はこの構造を政治化されたオルトドクシー、ないし簡単に、政治的オルトドクシーと呼びたい。ただあらかじめことわつ

ておきたいのは、ここで問題なのが信仰内容そのものではなく、むしろ二つの歯車たる信仰像と政治理念との、典礼儀式と世俗上の行動様式との、教義と国制原理との、政治と神学との、独自の、ほとんど余すところなき完全な咬み合いで、という点である。<sup>(17)</sup>引用にあるように政治的オルトドクシーの中身は信仰内容だけではないが、しかしもちろん一方の前提として信仰内容が在る。そして当時存在した状況とは、「東方の諸教会は、論争好きの神学者たちの教会」<sup>(18)</sup>といふのが、当の状況を言い表した表現である。同じ状況を別様に表現した『世界論』の文章をも見ると、

伝統と対峙し、さらにそれ自体の中で勝手次第を得るというこの特殊な流儀「すなわち、ギリシア人の教養意識」が、文学的活動を行なう新たな流儀——すなわち、キリスト教の神学——の中にも入り込んだことを、確認するのは容易だろう。確かにキリスト教は、救済の教えとして、教養人を優先的に相手にす

るような宗教などではなかつた。だがコンスタンティノス大帝以来、キリスト教徒たることが作法にかなつたこととなればなるほど、キリスト教の教えはどんどん文人たちの視界に入つてきて、その面倒を見るのに彼らは先祖伝来のやり方を以てした。キリスト教の根本教説に対する教養人の排他性要求などといふことは不可能事であり、それに代わつて、神学が成立したのである。だがここで重要なのは、その成立でも、信仰的教えに対する学問的神学による必然的補完ということでもなく、むしろ、いかにして神学が構想され、古い学派の教養人たちがいかにして自分たちの処理方法<sup>(19)</sup>をここでも通用させたかというその仕方、つまり連中の態度である。そして多くの場合この態度は、初期ビザンツ人がなおヘレンズムを使ひこなせたその程度に、純粹にヘレンズム的であり続けた。

ところでシュライナーの上記論考の見方に戻ると、ベックと親しく話せる間柄にあつた彼が、ベックのビザンツ研究との関連でベック自身の人生上の転機を重視することに對して、筆者ごときが異を唱えるのはたぶん誤りなのだろう。しかし、それによつてビザンツの神学・キリスト教に対するベックの見方が大きく変わつたとシュライナーが主張するのなら、それは果たして妥当かと問いたい気がする。例えばベックは、西欧中世の神学・哲学の大学者だつたマルティン・グラーブマン（一八七五—一九四九）の薰陶を受けたことを終生誇りに思つていたようであり、そしてその

述べられているのは、元来単に人々の救済を掲げた宗教だったキリスト教が内に神学を抱え込むことによつて変質していく、その変質の過程である。古代キリスト教史研

ような学問的背景から、ビザンツと西方（とはすなわち西欧中世のカトリック世界）の間の神学的交流といったテーマに早くから関心をいたいでいたようである。そのことは

ベックの処女論文のテーマからも明らかであり、そして同じテーマをベックが後々まで持ち続けたことも明白と言つてよい。<sup>(21)</sup>

単なる神学よりも神学の社会的機能といった点にベックが興味を示した理由（の一つ）としては、彼が様々な事情からビザンツ文学を本格的に研究する中で、この文学をどう評価するかという問題に深く思いを致すようになつた、といふことが挙げられるのではないか。つまり、彼のもう一つの主要な研究分野である（と評価するべきだと筆者には思われる）文学研究の方法が神学・キリスト教に関する研究にも適用されるようになつた、という事情があるのではなくいか。

この見方が妥当なら、ベックのビザンツ理解を論じる際には彼のビザンツ文学理解をも逸することができないことになる。

二〇一五年八月の本学会年次例会における本書の書評会の中で指摘されていたように、ベックはヨーロッパ文学に対する造詣が極めて深く、文学を扱った『世界論』第四章の冒頭で十字架のヨハネ『魂の暗夜』とダンテ『神曲』の書き出しが原文で比較されていることから明らかのように、（ヨーロッパの一流の知識人には当然の事なのだろうが）ベックはそれら文学作品を原語で、読み鑑賞することができたようである。ベック自身の論考が往々含蓄と皮肉に富み、必ずしも一読直ちに了解と行かないのは、彼のこのような豊富な読書経験・文学体験のゆえでもあるのだろう。

ところで、ベックがビザンツ文学の本格的な研究を始めたのはたぶん一九四〇年代後半、教授資格請求論文の主題となつたテオドロス・メトヒテスの研究の過程でだらうが、このメトヒテスは、総じてビザンツ人が古代ギリシア文学に対してもいたいたい圧倒的な憧憬と、比べて自分たち（の文学）の卑小さとを、「衝撃的な仕方で定句化」している。このことは、いかなる形であれ、ビザンツ文学にかかる者にとっての常識である。そしてベック以前のビ

#### 四・ビザンツの文学に関するベックの理解

ザンツ文学研究は、この文学の諸々の作品について（もちろん、比較的に言えば、ということだろうが）古典期の作品の「引用や暗示の確認、トポスや著作範型の証明」（『世界論』一五九頁）を以て能事終われりとしていたかのごとくであり、つまり概してビザンツ文学の作品は「作り物として「中古品」と見下されてよい文学」（同一五八頁）と扱われてきた<sup>(26)</sup>。これもまたビザンツ文学研究に関する公知の事実である。しかし、余人は知らず、ベック自身は無論そのような態度を探らず、むしろ例えは『世界論』第四章第二節でビザンツ文学の「有意味性」と「現実関連性」を論じていることからも明らかかなよう、ビザンツ文学の諸々の作品を、成立当時における有意味かつ現実関連的な作品として捉え返そうというスタンスを一貫して採ってきた。そしてこのことは当然、社会と文学の関係を考えるという視角に行き着き、かくて『世界論』の最終章「歴史」という次元」がビザンツにおける社会と文学というテーマを時代順に総まくりしていることは、まさにベックのそのような観点の独自性を明瞭に示していると言えよう。

そして実は、ビザンツ文学に対するこのようなアプローチは、たぶん今日でもなお、主流の研究方法に必ずしも

なっていない可能性がある。この点については筆者自身の個人的な経験を記すことをお許しいただきたい。筆者が一九九〇年代後半にベルギーのルーヴラン大学（フランス語圏）に留学して聽講した授業の中に、ビザンツ及び東方キリスト教に関する「百科学（Encyclopédie）」（言うなればビザンツ・東方キリスト教総まくり）という授業があり、筆者の指導教官だったウーゴ・ザネッティという学者（当時はボランディエストだったが、のちに辞めて、東方典礼の実施で有名なシュヴートニュ修道院（ベルギー、ベネディクト会）の修道士となつた）がこれを担当していた。そしてこの学者が授業中ビザンツ文学に関する文献紹介などをした際に、「ベックはそうではないが、フンガーはビザンツ文学をよく知っている」という言い方をしたのである。ここでザネッティが「おうとしたのはどうやら、ヘルベルト・フンガー（一九一四一二〇〇〇）は写本レベルからよく知っている」ということらしい<sup>(27)</sup>。確かにフンガーには写本の書体研究に関する業績もあり、また、ビザンツの高等語文学に関する彼の著作の中には写本情報が盛り込まれているので、フンガーに関する評価自体は確かにそのとおりなのだが、筆者がここで言いたいのはむしろ、ベックが『世界論』で披露

してみせた文学理解は、ヨーロッパのビザンツ学におけるビザンツ文学研究の主流に属するものでは必ずしもないのではないか、ということである。どうもビザンツ学における文学研究の主流は、ひょっとすると今日まで、テクストの校訂といった文献学的作業及びそれにまつわる様々な事柄を取り扱う、という性格のものなのではないか。

## 五・ベックのビザンツ理解の位置づけ

そして、もしこの評価が当たっているならば、実は『世界論』全体についても次のような評価が妥当なのではないか。すなわちこの『世界論』は、ビザンツに関する標準的な、或いは権威ある概説などとはいがなる意味でも言えず、むしろ、ベックという変わり者のビザンツ学者が、「君たちは知らないだろうが、実はビザンツとはこういうものなのだ、どうだ」と、世間（及び専門の学者たち）に向かつて挑発してみせた、という内容の本だったのではないか。

そう思いたくなる理由の一つとして、本書初版が刊行された一九七八年がベックが既に大学教授を辞めたあとだ

といふことが挙げられる。比較のために『世界論』（或いは原著名で *Jahrtausend*）と対比されるべき本として、例えば上記ファンガーの *Reich der neuen Mitte: der christliche Geist der byzantinischen Kultur* を挙げる事ができるが、同書は一九六五年、つまりファンガー自身がまだ現役バリバリの頃に出版されている。これに対してベックの場合、ドイツ・ビザンツ学を代表する立場にあった者として、*Jahrtausend* を在職中に出すのは、内容があまりに風変わりで、その意味でリスクが大きすぎたのではないか。例えば、第二章「国家と国制」は全体として、ビザンツの国制に関してはこれまでまともな研究が全く行なわれてこなかつたということを明らかにしている、と評することが可能であり、これだけでも充分に挑発的だろう。しかもベックの文章には、（筆者自身まだよくわかつっていないが）言うなればビザンツ仕込みの皮肉がいろいろと詰まっているらしい。

このように、訳してはみたものの、本書『ビザンツ世界論』には訳者たる筆者自身にとつてまだ良くわからぬところが多々ある（誤訳が数多く残っているといふことを言つているつもりでは必ずしもないのだが）。そのような本を読むことを読者があえて引き受けるかどうか。あとは読者

「自身に判断しただけかな。」

(北海道大学大学院文学研究科教員)

## 註

(一)

Hans-Georg Beck, *Das byzantinische Jahrtausend*, 2. ed., München: C.H. Beck, 1994. 初版は一九七八年刊。

(二)

H.-G. ベック／田中聰訳『ビザンツ世界論——ビザンツの千年』、知泉書館、一〇一四年。

(三)

但しあえて記すと、邦訳書には原著にない小見出しが多数挿入されている。それら小見出しを参照することによって、邦訳書を読む場合、著者の考え方の筋道をたどりにくいため、原著を読む場合よりも遙かに容易になつてゐるはずである。邦訳書が読みにくくと批判する人々は、それら小見出しが一切ない原著をまず独力で読解し、その上で、果たして邦訳書のほうが読みにくるものとなつてゐるかどうかを判断していただきたいと、訳者として強く希望する次第である。

(四)

この点は *Jahrtausend* の第一版への序言からも窺われ、やむべからず、一九九〇年に私的な文章として「よく親しく人々に頒布した *Abschied von Byzanz* の中でせまい」明

確じ、五〇以上の書評のうち九〇%は出版社が本のカバーに印刷した宣伝文を繰り返しているにすぎない、と述べている（一一頁）。なお本稿作成時点（一〇一五年九月二〇日）では、大変ありがたいことに *Abschied von Byzanz* の電子ファイルは（たぶんP・シュライナーによつてだらうと思われるが）閲覧可能な状態でインターネット上に置かれており、それゆえ、ベックと全く面識のなかつた筆者にも同文章の参照が可能となつた。

(五)

H.-G. ベック／渡辺金一編訳『ビザンツ世界の思考構造——文学創造の根底にあるもの』、岩波書店、一九七八年。

(六)

ここではおもに日本の学問状況を念頭に置いて記している。これに対して国際的な学問状況（例えば国際ビザンツ学会での研究発表のありよう）を見るなら、いじで書いたほどの分裂状況があるとは言えないかもしだれない。しかし、ビザンツを史的研究の対象（つまり過去のもの）として扱うビザンツ学と、何らかの意味で現代的ないし実存的な関心と往々つながつてゐる東方キリスト教研究との間には、日本でも国際的にも、やはり何らか分裂状況があると理解して的外れでないようと思われる。

(七)

Hildebrand Beck, *Vorsehung und Vorherbestimmung in der theologischen Literatur der Byzantiner* (Orientalia Christiana Analecta, 114), Roma: Pont. institutum orientalium studiorum, 1937. ヘルト・アーハーネンは修道士だった時の

書の表題の中にも確かにビザンツ（ビザンツ人）という言葉は含まれており、それを以て、ベックは最初からビザンツ研究を指向していたと推測することはもちろん不可能でないが、こと神学に関しては、ビザンツ神学研究と東方キリスト教研究とを区別することは全く実態にそぐわないだろう。

(8)『ビザンツ世界の思考構造』、一一一七一一八頁〔 〕は

『ビザンツ世界の思考構造』、一二七一三八頁〔〔〕は戸田による補記。これと同様の言い方はハンス・ゲオルク・ベック／渡辺金一訳「社会を映し出す鏡としてのビザンツ文学」「思想」六五四（一九七八）一〇五頁（訳者解題の中の一文）にも見られる。

(σ) P. SCHREINER, "Nachruf. Hans-Georg Beck (18.2.1910-25.5.1999)", *Byzantinische Zeitschrift* (*ByzZ*) 92 (1999), pp. 812-816, at p. 814.

(10) 社会構造史や国制史に関する（つまり『ビザンツ世界論』

第十一章「國家と國制」に闇連する）ミラクルの藍題の書  
論考を挙げると H.-G. BECK, "Reichsidee und nationale  
Politik im späbyzantinischen Staat", *ByZ* 53 (1960), pp. 86-  
94; Ib., "Konstantinopel. Zur Sozialgeschichte einer früh-  
mittelalterlichen Hauptstadt", *ByZ* 58 (1965), pp. 11-45 (本  
論考はむしろ『圭界論』第一章との闇連や論考の本筋を  
めぐらしが、余談たる題旨及してある) ; Ib., *Byzantinisches  
Gefolgshafswesen* (Sitzungsbücher der Bayerischen  
Akademie der Wissenschaften, Klasse für Klassische Philologie,  
Band 10, 1966).

Akademie der Wissenschaften. Philosophisch-Historische Klasse (SBAWPH), Jahrgang 1965, Heft 5), München: Verlag der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, 1965; Id., *Senat und Volk von Konstantinopel* (SBAWPH, Jahrgang 1966, Heft 6), 1966; Id., *Res Publica Romana. Vom Staatsdenken der Byzantiner* (SBAWPH, Jahrgang 1970, Heft 2), 1970; Id., *Theorie und Praxis im Aufbau der byzantinischen Zentralverwaltung* (SBAWPH, Jahrgang 1974, Heft 8), 1974.

『聖帝論』の第一二章に關する文献案内（巻末横組み部分の  
〔左欄〕—〔右欄〕）を參照。

を私が繰り広げて見せた時に、完全な賛同の意を示してくれた人でもあつた」と書いてゐる（一八頁、皇帝理念・帝国理念に関する註）。これら二か所に見られる「完全な賛同」が同じ研究テーマにかかるるゝこと明瞭である。かくてベックは皇帝理念について、前任者の同意をも得てこれを十全に論じられるよべ、相当包括的な研究を行なつていただらし。

(12)

正確を期すべく、一九五五年発表の H.-G. Beck, "Der byzantinische Ministerpräsident", *Byz* 48 (1955), pp. 309-338 は、『世界論』第一章第六節で扱われた「官僚制の外に設置された統治機能（バラテュナスティウオーンなど）』に関する論考だが、この項には既にベックが「ヨーロッパの界隈でトルガーレの後任と目され始めていた可能性がある。おだ、一九七八年発表の論考 H.-G. Beck, "Die Mobilität der byzantinischen Gesellschaft", *Orient* 14 (1978), pp. 1-14 も社会史或いは社会構造史にかかる論考だが、ベックのこの論考は同年の来日時の講演の活字化の一つである。内容的に見て、同年に刊行された *Jahrtausend* 初版（上註 1 を参照）の中の関連する部分の要約と理解する方が妥当である。

(13) 「ユザンノフ的思考世界についての覚書」。渡辺金一『ユザンノフ社会経済史研究』、岩波書店、一九六八年、七九一九八頁所収。註に明かぬように論考の全篇におこしてルガーレの諸業績が参照されてゐる。

(14) 前註の論考中、ベックの業績への言及があるのは註 13 (八九頁) の末尾におけるものである。

(15) P. SCHREINER, "Hans-Georg Beck und die Byzantinische Theologie. Zum hundertsten Geburtstag eines grossen Gelehrten", in: A. Rigo (ed.), *Byzantine Theology and its Philosophical Background*, Turnhout: Brepols, 2011, pp. 197-212, at p. 211. 特に SCHREINER, art. cit., pp. 198-199 参照。

(16) 特に SCHREINER, art. cit., pp. 198-199 参照。

(17) 『忠告構造』、一四頁。

(18) 『忠告構造』、一五頁。傍縁による強調は田口田口によく。

(19) 『忠告論』、一一一頁。傍縁による強調は田口田口によく。

(20) この問題に関する最近の論説として Ch. MARKSCHES, *Hellenisierung des Christentums. Sinn und Ursprung einer historischen Deutungskategorie* (Forum Theologische Literaturzeitung, 25), Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 2012 があるが、本書の論説は元の幾余りになつた。

(21) H. BECK, "Der Kampf um den thomistischen Theologiebegriff in Byzanz", *Divus Thomas* 13 (1935), pp. 1-22. 註脚未記。

(22) 同上トマスの著作の関心の繙説を示す論考として例へば、H.-G. Beck, "Die „Apologia pro vita sua“ des Demetrios Kydones", *Ostkirchliche Studien* 1 (1952), pp. 208-225, 264-282 がある。この論文の主要部分はアメトーリオス・キヨラーネスの自伝のドイツ語訳であつ、そしてトマスの語訳の抜粋が『世界論』、五三〇-五三六頁に収録される。

(23)

*Abschied von Byzanz*, p. 17 に述べる。ベックは一九三〇年の（一九二〇歳の時）のローマ留学の際に知遇を得たマサニエールの全集を読み、またボンヌエやフェヌロンを部分的に読んだ（当然ながらすべて原語で、だらう）。とのことである。

(24)

なお、その後ベックはビザンツの「わざる」民衆文学に関する決定版たる基本的文献を著してゐる。H.G. Beck,

*Geschichte der byzantinischen Volksliteratur* (Byzantinisches

Handbuch im Rahmen des Handbuchs der Altertumswissenschaft, 2. Teil, 3. Band), München: C.H. Beck, 1971.

(25)

『距離構造』、二九頁。前の定句化は同八八頁に見られる。〔やうに書われたすぐれた他人によいで書われており、声を出して書へぐれむる、ゆはや今日のわれわれにはのれねてこなる〕

(26)

「やうに書へ「母和唱」文辭ひば」形成した瞬間から「母和唱」であるたゞこの文学のいとくある。

(27)

など、ギネットイの評価には、彼の師だつたガリット・Gérard Garitte (1914-1990) よりもベックに対する評価が影を落としている可能性がある。すなわちガリットは、ギリシャの神学及びキリスト教文学に関するベックの「*Hellenische Kirche und theologische Literatur im byzantinischen Reich* (Byzantinisches Handbuch im Rahmen des Handbuchs der Altertumswissenschaft, 2. Teil, 1. Band), München: C.H.

Beck, 1959」に対する書評を行なつてゐる (*Revue d'histoire ecclésiastique* 54 (1959), pp. 920-928)。なお、田口洋子「聖界論」紙面あわがわ、五六十頁註ひどりの書評も「[ベックの] 同書刊行の翌年一九六〇年に出されたルーガン大学教授G・ガリットによる同書書評」と紹介したのは不正確で、訂正を要する)、その中で、同書が含む大小

様々な諧記等々が極めて事細かに記されてゐる。しかもガリットは、ベックの大著が「la maîtrise avec laquelle il domine et synthétise une matière immense 〔[ベック] (一九二〇) とじう讀辞をわざわざ書いたあとで、細かに字じ図く一矢強にわたりて諧記等々を指摘してゐるのである。」の辛辣な書評がベックに痛撃を与えた可能性は想定できる。

(28)

H. HUNGER, *Repertorium der griechischen Kopisten 800-1600*, vol. 1: *Handschriften aus Bibliotheken Grossbritanniens*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1981.

(29)

Ib., *Die hochsprachliche profane Literatur der Byzantiner* (Byzantinisches Handbuch im Rahmen des Handbuchs der Altertumswissenschaft, 5. Teil), 2 vols., München: C.H. Beck, 1978.

(30)

「れに闇ホトケルニ」(「だな闇ホトケルニ」) ベックは、ギリシャ「ハニネシオスやナシトノバ」へのケルコナベ、セントスの皇妃テオドラとプロ

コピオスは、私にとって初期ビザンツの単なる代表者と  
いうより遙かに一層多くのものとなつた」と述べている  
(一三頁)。いずれも『世界論』で印象深く登場してきて  
いる人物たちだが、この言葉が何を言わんとしているの  
か、筆者は今なお掘みかねていると告白せざるをえない。